

## 平野彧の作文指導の特色と意義

### — 日記指導を中心に —

田中 宏幸

キーワード：日記の年間指導計画、課題設定、評価と処理、表現技能の段階的指導

#### 1. はじめに

平野<sup>いく</sup>彧（1929-2007）は、文集づくり、日記指導、新聞活動を中心に、作文指導と学級づくりに力を注いだ栃木県下の小学校教員である。

平野は、1959年に藤岡町立赤麻<sup>あかま</sup>小学校に転勤し、6年生を担当して以来、16年間にわたって学級文集「くろんぼ」（通巻69号）を軸にした学級づくりを展開した。（「くろんぼ」という文集名は、この学級で「勉強に、運動に、仕事に、まっ黒になって努力の汗を流していこう」という子どもたちへの願いを込めて、名づけられたものである。）



NHK-TV放映（1972. 2）

1966年、宇都宮大学で内地留学生として「作文指導の方法」について研究した後、1968～1969年には、作文指導計画の改善に取り組み、年度当初は200字も書けなかった児童を、年度末には原稿用紙70枚も書けるように導いた。さらに、1971～1972年には、「読売つづり方コンクール高学年の部」で2年連続第1位受賞に導くなど、質・量ともに優れた実践成果を収めていった。

一方、平野は、自らの実践を詳細に記録し、積極的に公開していった。1972年から2002年までの約30年間に、家庭教育や戦争体験に関する著述もあわせ、全19冊を刊行している。そのうち、作文指導関係の著書は9冊である。（本稿末の資料参照）

こうした平野の業績は、NHK-TVで「豆記者奮闘記」として紹介（1972年2月放映）され、『新聞活動と学級づくり』（1975）の第1章・第2章は、『日本の教師〈第4巻〉』（松平信久編、ぎょうせい、1995）に「学級文化の創造」事例として収載された。一方、国語教育界では、『新題材による作文指導』（1977）が、高森邦明（1984）によって「言語生活的作文」の秀でた事例として取り上げられ、大内善一（1996）によって「アイデア題材による作文授業づくり」の先駆的事例として評価された。

さて、このような実践成果は、どのようにして生み出されたのであろうか。端的に言えば、平野の作文題材の発掘や課題設定の工夫が「書く内容」の発見を導き、児童をして「書くこと」に夢中にさせるとともに、「表現技能」を段階的・計画的に習得させたことが功を奏したのである。平野が指導した文種は、いわゆる生活文にとどまらず、対談、手紙文、案内文、物語文、詩、説

明文、意見文、記事文、調査報告に至るまで多岐にわたっていた。平野の著書には、各実践の詳細と指導のねらい、児童作文例が数多く載録されており、これらを手掛かりとして分析・検討していけば、これからの時代にも生きる作文指導理論と方法の解明に役立つに違いない。本稿では、1968～1969年の2年間の実践がまとめられた第1著書『作文指導と学級づくり』（1972）を中心資料として、日記指導の実際を具体的に分析し、その特色と意義について考察を加えたい。

## 2. 作文の年間指導計画の改善

### 2.1. 作文力の実態分析を起点に

平野の作文指導の改善は、児童の作文力の実態分析から始まる。1968年4月、5年生（「くろんぼ学級」7期生32名、その後2年連続して担任）に「わたしのおかあさん」という題で自由に作文を書かせたところ、学級全体は地域の平均的学力を有しているにもかかわらず、7名は200字を埋めるのが精一杯という状態であった。また、表現力の優れている部位に入る児童でさえ類型的・概念的な作文しか書けず、以下の問題を抱えていた。（以下、平野の分析を要約する）

- ①取材・選材意識が乏しい。羅列的、断片的な題材の取り上げ方である。
- ②構成意識も乏しい。時間的順序もしくは印象度の順に説明するために、読み進めるにつれ感動が薄れていくものが多い。
- ③書き出しや結びに工夫がない。「うちのお母さんは」で書き出し、「と思いました」で結んでしまう。
- ④会話を、すじの発展、その時の気持ちの表れとして意図的に使うことができない。また、会話の前後における周囲の様子を描写しようとししない。
- ⑤会話に続く地の文から文体が変わってしまう。最初から読み手を考えに入れていない。

平野は、こうした課題を解決するには、ねらいをできるだけ絞り、基本的な技能をステップを踏んで指導していく必要があると痛感し、年間指導計画の改善に取りかかっていた。

### 2.2. 作文の年間指導計画の特色

平野は年間指導計画を立てるにあたって、「授業時の指導」と「授業外の指導」の二本立てで構造化していくこととした。「授業時の指導」は、「研究作文」（作文能力の総合的な育成をねらった指導）、「教科書作文」（読むことと関連づけた指導）、「練習文」（作文技能の取り立て指導）を組み合わせたものとなっている。年間指導時間数は、「研究作文」15時間、「練習文」5時間、「教科書作文」40時間、計60時間である。

「授業外の指導」は、「日記指導」を中心として積み重ねていくものである。しかし、「日記」といっても、単に生活の記録を書かせるわけではない。文体に変化を持たせるとともに、授業と関連させた技能練習的な日記を書かせているところに特徴がある。「生活文的な日記から、感想、意見、詩、手紙、観察記録、創作などまで、はば広い範囲で日記活動の展開をはかることにより、書くことへの楽しさを育てながら力を確かなものにしていきたい」（平野1972、p. 27）というねらいを持って、週ごとに異なる課題（日記指導計画表の備考欄参照）を与えていた。

### 3. 年間作文指導計画

年間作文指導計画表から、「研究作文」と「日記指導」の部分抽出してみよう。

1968（昭和43）年度 第5学年 日記指導計画

（『作文指導と学級づくり』pp. 28-33）

月	研究作文	週	指導内容	取材	構想	記述	推考	他	備考
4	〇〇〇のおかあさん(1)	1	題をつけて書く	○	◎				・書くことがらをはっきりさせる。 ・題からはずれないように注意させる。
		2	会話で書く			○			・友人、家人の会話のスケッチをさせる。
		3	よく観察して書く			○			・家の人が仕事などをしているようす、動作などをできるだけこまかに書かせる。
		4	書き出しをくふうして書く	○					・「きのう、きょう、ぼくは、を使わせない。主として、会話で」書き出させる。
5	日光見学の記録(2)	5	ようすをくわしく書く			○			・会話、表情、動作を織りこんで書かせる。
		6	かじょうがきで書く			○			・できごとを順序よく、メモ風にまとめて書かせる。
		7	文章の組み立てを考えて書く			○			・文章構成だけの日記を書かせる。
		8	漢字をできるだけ使って書く					○ 言葉	・辞書を利用させる。 ・使用漢字数について、相互評価をさせる。
6	夏の詩(1)	9	書き出しと結びをくふうして書く			○			・構想メモを書き、書き出しと結びだけを書かせる。
		10	中心点をくわしく書く			○			・中心になるところの前後は、メモ程度に書かせる。
		11	句読点に注意して書く				○		・音読して相互批正をさせる。
		12	敬体と常体に注意して書く				○	○ 言葉	・毎日、目的、読み手を代えて、それに応じた文章、文体で書かせる。
7	夏休みの計画を知らせる(手紙)(1)	13	かじょうがきで書く			○			・できごとや自分の考えをかじょう書きで書かせる。
		14	事実と感想をくべつして書く			○			・事実の面はメモ程度、感想、意見は文章でまとめて書かせる。
		15	図や表をいれながら夏休みの計画について考えて書く	○	◎				・指示語や接続語を適切に使わせる。 ・図表の書き方、いれ方にも気をくばらせる。
9	わが家のじまん(2)	16	材料をととのえて書く	○					・集材メモだけを書かせる。 ・1日分だけはメモをもとに文章にまとめさせてみる。
		17	段落に注意して書く			○			・構想図をもとに、小見出しをつけて書かせる。
		18	会話を生かして書く				○		・会話をすじの運びとして生かし、思いきって長文で書かせる。
		19	短的に感想を書く	○					・社会のできごとに取材し、5行程度で感想をまとめさせる。
10		20	新しい材料をさがして書く	○					・題名、いちばん書きたいことだけを書かせる。
		21	引用、引例を用いて書く				○		・先生、家人、他人の言葉、図書などから例を引いて、考えをまとめて書く。
		22	字面の乱れに気をつけて正しく書く					○ 書写	・辞書を利用させる。 ・文字の形、大きさなどに注意して丁寧に書かせる。
		23	かじょうがきで書く				○		・出来事をいくつかの項目ごとにメモ風に書かせる。

月	研究 作文	週	指導内容	取 材	構 想	記 述	推 考	他	備 考
11	秋の詩(1)	24	「ひゆ」をいれて書く			○			・「…みたいな」「…のような」という表現を使って書かせる。
		25	効果的に表現を考えて書く				○		・題をつけ、標語的な表現で書かせる。
	ぐんと胸 にきたこ と(1)	26	文章の組み立てを考えて書く		○				・小見出しをつけて文章の組み立てを作り、書き出しと結びの文、段落の冒頭の言葉だけを書かせる。
		27	かなづかいに注意して正しく書く				○		・送りがな、長音、「ち」「づ」の使い方に注意し、相互評価させる。
12	特ダネを さがして (2)	28	レイアウトをくふうして書く					○ 編集	・スペースを1日1ページと決め、そのわくの中で、小見出し、かこみの欄などを作ってまとめさせる。
		29	取材メモを書く	○					・決められた題材のもとに、集材、選材をさせる。
		30	考えをまとめて書く		○				・指示語や接続語を適切に使わせながら、構想メモだけを書かせる。
1		31	読み手をはっきりさせて紹介文を書く			○			・学級、学校、休み中のできごとなどを、みんなに知らせるのにふさわしい書き方をさせる。
		32	かじょうがきで書く				○		・ローマ字日記として書かせる。
		33	漢字を適切に使って書く					○ 言葉	・辞書を利用させる。 ・使用の不適切、誤字について相互評価をさせる。
2	このごろ のできご とのなか ら(2)	34	資料を生かして書く			○		◎ 編集	・成績物、表、グラフ、写真その他の資料を使って、総合的な日記を書かせる。
		35	正確な文を書く				○		・文のねじれや語句のかかり方に注意して書かせる。
		36	生活メモを書く	○					・できごとの項目に、図や数字の書きこみをつけながらメモ風に書かせる。
		37	創作文を書く	○	○	○	○		・かんたんなお話を書かせる。1週間分、つづきものとして書いてもよい。
3	国内旅行 記(2)	38	目的に応じた記録を書く (架空の国内旅行記)	○	○	○	○	○ 編集	・さまざまな種別、内容に応じて、表現形式を考えたり、くふうしたりしながら、自由研究的な態度で思い出の記録となるような日記を書かせる。
		39							
		40							

この表を見れば、「取材」「構想」「記述」「推考」という文章表現過程のどこに重点を置くかが明確にされ、螺旋状に反復練習できるように、各種の課題が配置されていることがわかるであろう。また、年度後半には図表・グラフ・写真などを組み入れた編集作業が設定されており、総合的な表現力が次第に養われていくように仕組まれていることも見て取れるであろう。平野は、目的が明確であり、楽しく取り組める課題設定に心を砕くとともに、研究作文や教科書作文など授業で「書くこと」が多い週には、日記の課題を負担の少ないものにするなど、児童の実態に即した無理のない計画を立てていったのである。

#### 4. 夏休みの「書く活動」

上記の表には示されていない夏休みには、二つの取り組みをさせている。

一つは、集録方式の日々の学習記録である。毎日の家庭学習や日記の用紙を同一サイズの「ざ

ら紙」に記入させ、教科別のページ作りを重ねていき、夏休みの最後にこれらの結果を「集録」としてまとめていくのである。こうすれば、部厚いものを作りあげたという達成感を持たせることができ、教師も児童の努力の状況を評価することができるというわけである。

もう一つは、研究や調査の記録文である。調査、観察、考察を通して、図表の作り方や資料の生かし方などを確かなものにさせていく一方、個人指導にも力を入れ、作品としての質を上げて、コンクールにも参加させていくことにした。こうして、「藤岡町のかんたく」（藤岡町の干拓事業に関する調査記録）や「赤麻キツネばなし」（郷土の昔話と全国各地の民話・伝説との比較研究）など、いずれも原稿用紙30枚超の長文を書き上げることができるようになり、児童に希望と自信を持たせることが可能になった。

翌年には、さらに、「楽しさのあふれる日記」「形式に変化を持たせた日記」を書くように強調した。例えば「大版日記」の場合、八つ切りの画用紙を用い、一日のできごとの中から取り上げるのに値するニュース（新聞記事）をいくつかピックアップして貼り付け、レイアウトも工夫しながら、感想を書いていくのである。この他、「絵巻物風の日記」、「図形を多用した日記」、「対談風の日記」など、集録として仕上げる形式にも工夫するように求めると、児童はいっそう意欲的に書くようになっていった。テレビ番組（「ニュース」「自然のアルバム」「明るい農村」など）のいちばん印象的な場面を絵で再現した上に自分の感想を書き足した日記、漫画の登場人物を組み合わせて少女小説に仕立てていった「まん画創作日記」、一日の時刻の流れを鉄道に見立てて図表・カット・写真を配して出来事や感想をメモ風書きこんでいった日記など、作品をまとめることへの喜びが感じられる日記が次々と生まれていった。

## 5. 日記指導の工夫—課題設定と評価・処理

日記指導の重要性は多くの教師に認められているにもかかわらず、十分な成果が得られぬまま、年度途中で取りやめてしまうことが少なくない。書く材料、形式が毎日同じようなことの繰り返しとなって、興味も必要感も失われてしまうのである。そこで、平野は、各週の課題設定や日常の評価・処理において、以下のような工夫を重ねていく。

### 5.1. 課題の設定

平野は、「無理なく、無駄なく、むらなく」の「三む主義」を掲げ、書くことに弾みをつけることを重視して、週ごとに多彩な課題を設定する。例えば、次のような課題である。

#### (1) 題名をつけて書くことから（第1週）

初期段階の取材指導である。題名を先につけてから書かせることによって、話題が他へ移ることを防ぐのがねらいである。また、書くことからの焦点づけや取材内容の切りとり方など、選材への目を開かせることができる。さらに、取材帳としての役割を持たせることも可能となる。平野は、題名からそれたことがら、不必要に書き足してある文章は、赤ペンで囲みながら、題名と照応させて削除するように指摘していった。こうすることによって、後には、文章が書き終わると、題名を修正したり、工夫して付け直したりする子も出てくるようになった。

## (2) 会話文のはたらきを理解させるために (第2週)

家族の会話をスケッチさせることによって、実際の話し言葉と会話文(書き言葉)との差に気づかせるのがねらいである。週の前半は、誰かが話し合っていることを片っ端から書きとめておくという速記的な力も必要とする日記を書かせ、週の後半には、日記の上段に会話のスケッチ、下段にはスケッチした会話を整理して書かせたものも並記させるという方法をとっている。会話文では、「筋の展開に不必要な言葉を省くこと」や「話し手の性格まで分かるように書くこと」が重要であることを理解させるためである。

## (3) 描写力をつけるために (第3・5週)

第3週「よく観察して書く」は、家族が仕事をしている時や休んでいる時の様子をできるだけ細かに観察的な目で書こうという課題である。母親がお勝手に包丁を使っているときの動作、父親が新聞を読んでいるときの格好、兄がテレビに見入っているときの様子など、毎日、観察対象を変えて書かせている。こうした練習的日記を書かせることによって、比喩的表現がふんだんに使われるようになり、会話文を挿入する子が日増しに増えてくる。

また、第5週「ようすをくわしく書く」は、地の文に会話、表情、動作を織りこんで、できるだけ長文を書かせようという課題である。このころになると、日記帳に3~4ページも書いてくる子が目立って多くなっている。

## (4) 書き出しを工夫させることによって (第4週)

読み手の気持ちを誘うような書き出し文の書き方を身に付けさせるために、「今日は」「ぼくは」「わたしは」など、日時や主語から始まる決まりきった書き出しを禁じ、ヤマ場に近いところから会話で書き出すことにするという課題である。慣れないために、はじめの3日ぐらひは、

<p>おわり</p> <p>⑦ おばあちゃんにしかれたことと小づかいをためてもっといいサボテンをかってきてやろうと思ったこと</p>	<p>な</p> <p>⑥ うえ木ばちがじゃまなのでよせようとしたらわかれてしまい、おばあちゃんにさわぎだした</p> <p>⑤ 勉強をしていたら、おばあちゃんにせんとく物をほしにきたので、どきどきしながら見ていたこと</p> <p>④ 見ていた人がいなくなったので、われめをくっつけるようにして、しらんぷりをした</p> <p>③ 一メートルぐらいの高さにしたときとびそこなつてころんでしまいい、うえ木ばちをわけてしまったこと</p>	<p>はじめ</p> <p>① 体いくの時間に高とびをやった。あき代ちゃんは一メートルのバアをとんだが、わたしはだめだった。いくらやっても九十五センチまでしかいかなかった。くやくしてしようがなかった。</p>	<p style="text-align: center;"><b>藤橋節子さんの「おばあちゃんにさわぎだした」という日記を書いてみます。</b></p> <p>組み立ては、つぎのようなかたちになっています。たいへんじょうずに書かれています。書き出しをふうしたら、もっとじょうずな文章になるのではないかと思います。さて、みなさんだったら、書き出しはどのようなことからはじめましょう。</p> <p>上と下の書き出し文をくらべながら考えてみましょう。</p>
<p>⑦ 上段と同じ</p>	<p>③ 「それ」</p> <p>② 気合いとどに思いきりふみきつたが、かたあしがひっかかりとびそこなつた。つんのめったとき、左足のさきにゴツンと何かがぶつかった。はつとして、足もとをみると「ああ……」</p> <p>① うえ木ばちが三つにわかれていたのだ。「どうしたらいいだろう。これはおばあちゃんがいじにしていううえ木ばちなのだ。」</p> <p>④ わたしはすっかりあわててしまった。</p> <p>(上段と同じ)</p>	<p>③ 「あつ、しまった。」</p> <p>② と思ったときは、おそかった。うえ木ばちは三つにわかれて、サボテンはまるでとび出してしまった。おばあちゃんがいじせわをしているだいなサボテンなのだ。</p> <p>① 「どうしたら、いいだろう。」</p> <p>わたしは、どきどきしてしまった。</p>	

(『作文指導と学級づくり』 p. 40)

続く段落がわからずに支離滅裂なものが飛び出してくるということになるが、そういうときには、文章構成についても考えなければならないことを、作品例などをプリントして教えていく。描写力をつけるとともに、読み手意識を持たせ、文章構成について考えさせる契機とするのである。

#### (5) メモ程度に書かせることも (第6・7・9・10・13・14・16週など)

第5週のような長文をいつも書かせようとしても無理である。子どもたちの日々の生活はさほど変化に富んだものではないから、長文を書くのに値するような内容価値の高い日というのは少ないものである。平野は、それならば、短文の日が多くあってもかまわないと考え、メモ風に箇条書きに書き付けることも取り入れていく。見学記録文や観察記録文で学んだ簡潔で要領を得たメモの書き方を、日常生活のあらゆる場面で使いこなせるようにするのである。

この方法は、児童にとって負担感の軽減になるとともに、学習内容の明確化にも繋がるものである。「文章の組み立てを考えて書く」(第7週)、「書き出しと結びをくふうして書く」(第9週)、「事実と感想をくべつして書く」(第14週)、「材料をととのえて書く」(第16週)などにおいて、効果的に用いられている。

#### (6) 取材力を高める (第1・15・16・19・20・29・36・37・38~40週)

平野は、題材を豊かにさせるために取材指導に力を入れていた。日記指導に端的に表れているのは、「材料をととのえて書く」(第16週)、「短<sup>マ</sup>的に感想を書く」(第19週)、「新しい材料をさがして書く」(第20週)である。題名だけを書かせたり、集材メモだけを書かせたり、社会のできごとに対して5行程度の感想を書かせたりしている。ただし、この場合でも、1週間のうち1日分だけは、メモをもとに文章にまとめさせている点に注目したい。筋道立てて考える習慣を持続させるためである。

#### (7) 構想力を高める (第4・7・9・14・17・26・30・37・38~40週)

長文が書けるようになるには、構想力の向上が欠かせない。だが、毎日の日記で長文を書かせるのは困難である。そこで、量的負担を軽減するとともに、文章全体へ目配りができるようにするために、「文章構成だけの日記」(第7週)、「構想メモを書き、書き出しと結びだけを文章で書く」(第9週)、「事実と感想を区別し、事実の面はメモ程度、感想・意見は文章で書く」(第14週)、「構想図をもとに、小見出しをつけて書かせる」(第17週)などの課題を与えている。

#### (8) 記述力を高める (第10・12・15・18・21・23・24・31・34・37・38~40週など)

日々の出来事や反省を書かせるだけでなく、紹介文(第31週)や創作文(第37週)など、多様な表現スタイルを採用している点が特徴的である。「毎日、目的・読み手を代えて、それに応じた文章・文体で書かせる」(第12週)は、「ことばの学習」(常体と敬体の使い分けなど)を兼ねている。「図や表を入れながら夏休みの計画について考えて書く」(第15週)、「引用・引例を用いて書く」(第21週)、「資料を生かして書く」(第34週)など、編集能力を育てていく課題も設定されている。描写力だけでなく、説明的な文章表現力も高めようとしたのである。

## 5.2. 評価・処理の工夫

日記指導が低調になる原因は教師側にもある。忙しさに追われて、十分な指導ができなくなる

のである。とすれば、多忙な日々の仕事の合間に目を通すことができ、児童の表現意欲の喚起に繋がる評価・処理法を開発することが重要な課題となる。いかにして処理時間を確保するか。効果的な指導語（評価言）はどのようなものか。量と質の両面から解決策を講じなければならない。

### (1) 処理時間の確保と提出者の分散化

平野は、処理時間を確保するために、提出者の分散化を図る。児童を月曜班～木曜班の4班に分け、指定された曜日に、登校した順に教卓の上に提出させるのである。こうすれば、一日8人程度ずつ目を通せばよいことになり、短時間に処理できる。なお、金曜・土曜（当時は学校週6日制）は、特に読んでもらいたい子だけが提出することとして、個別のいっそうの伸長を図る。

それでも、処理する時間さえ確保できない日もある。そういうときは、子どもたちが自己評価や相互評価できる課題に絞り込む。例えば、「知っている漢字をできるだけ使って書く」「字画の乱れに気をつけて正しく書く」という課題の場合、使用漢字総数をカウントし、正しい漢字数の比率の計算をさせる。これならば、数的処理が中心なので、児童の力量で点検しあうことができ、先生役を担わせることで学習意欲を高めることにもつながってくる。

### (2) 指導語の工夫

学習者を励まし、作文力を向上させていくには、短時間で効果的な指導語を書き付けねばならない。そこで平野は、次のような指導語を書き留めるようにしている。（平野1972、pp. 46-47）

#### 〈表現について〉

・事実と感想をはっきりわけて書いたね。読んでいて、とてもわかりやすいよ。感想をかじょう書きで書いていくともっとわかりやすくなったかもしれないよ。たとえば、

1 ○○君は、へいきでうそを言うこと

2 実に、ようりょうがいいこと

3 いじわるをたのしんでいるようにみえること

こんなふうにしてみたら、どうだろうね。（指示）

・あみをかぶせても、カナカナはきけんもしらずにじっと木にとまっている。あみをかぶせられ、思わずにげようとしてあみのおくにつつこんでから「これはたいへんだ」と、はじめてわかったように、ギギギとなきながら、がむしゃらにあばれた——とは、よくそのときの感じをあらわしているね。よく見ていたね。○○君の目は、実にいい目だ。これからもそのいい目をうんとはたらかせて、どんどん書いていこう。（激励）

#### 〈表記について〉

・漢字142/143だいたい正確に使用しているね。あすもオール正確といこう。（激励）

・読点のうち方がひどいなあ。教科書四十一ページを見て、どういうところにうったらよいか考えてみよう。気づいたことを、つぎの□の中に、かじょう書きで書いておこう。書きおわったら、先生にもう一度、見せてほしいな。（指示）

#### 〈内容について〉

・たしかに、君の言うとおりで。はらがたつのも無理はない。みんなにも考えてもらった方がいい。ぜひ、学級会に問題として出してくれ。（共感・指示）

・しかし、ぼくは注意するのをやめて、「○○君、ぼくがてつだってやるから」といって、○○君のそうじの場所をふきはじめた——ということになったら、どうなったかな。あんがい、この日記も書かないようがかわったのではないかな？ どうだい、きみの意見は？（誘導・暗示）

このように、具体的な指示をしたり、激励の言葉を書き付けたり、別の見方を提示したりして



いくのである。その際、平野が留意したのは、次の6点であった。(平野1972、p. 47)

- ①書かせるねらいに即して書く。
- ②一読後、次時から指導語に応じられるようなことを取り上げる。
- ③指導語と、評価記号を併用して書く。
- ④よい点を必ず見つけ出してやる。
- ⑤ときには、指導語の中にわざと推考記号を入れて書く。
- ⑥自分の書いている指導語の性質を分析し、型にはまったことばかり書かないように心がける。

### (3) 日記の活用による達成感の獲得

とはいえ、指導語だけで、より正しくわかりやすい文章を書こうという意欲の高まりにまで至らせるのは、困難である。良い例として読みあげたり、プリントしたり、展示したりすることによって、満足感を与えていく必要がある。そのために平野は、右表のようなノートを作り、児童作文の活用方法をチェックしていった。

また、作文用紙にも工夫を凝らし、最初こそ市販の縦罫ノートで形を整えておくが、3冊目からはざら紙を用いて、レイアウトも自由にさせていく。すると、テストや習字作品を添付したり、図表や新聞記事を入れて感想や意見を書き

話 題	題 名	作 者 名	書いた日	使用するとき、方法
友情について	そうじのとき	与一	4. 24	道徳プリント
配膳がすむまでの協力がたりないこと	ぼくの考え	一郎	4. 26	給食のとき 説話
文のねじれを直す	つつじとり 公代ちゃんのおかあさん	文子 悦子	4. 30	作文の時間 板書
努力することのとうとさ	とけた問題	君子	5. 7	算数の時間 読む
ようすをくわしく書く (場面描写)	わたしのさいふ	洋子	5. 9	作文の時間 プリント
同 上	母の仕事	和子	5. 10	同 上
日記を書く時間について	きのうのこと	幸子	5. 13	帰りの話しあい 説話
努力することのよさ	あんちゃんのかいたまん画	久江	5. 14	朝の話しあい 説話
ようすをくわしく書く (会話の使い方)	二本のいちょうの木	淳子	5. 17	作文の時間 プリント
書写のきれいさ	(ノート2冊分)	裕子	5. 21	展示

(『作文指導と学級づくり』p. 48/注：作者名の一部は、引用者が削除した。)

付けたりするようになる。表現形式の工夫が、意欲の喚起や編集意識の向上にまで繋がっていくのである。そして、50枚程度たまったところで綴じ合せ、表紙をつける。さらに、天地を裁断して仕上がりをきれいにする。このようなひと手間をかけることによって、大切に残しておきたい貴重な成長の記録となり、達成感を持たせることに繋がっていくのである。

## 6. 発展していく日記指導

平野の日記指導は、翌年には「新聞日記」(新聞形式による日記。『新聞活動と学級づくり』では「日記新聞」に呼称が改められている)へとスタイルを変更していく。児童のなかに、決まった文体、形式で書くことへの倦怠感が生じてきたからである。

「新聞日記」では、生活日記のように一つの事象を取り上げて詳しく書かせるのではない。一日の生活の中から、取材内容として拾えるものをできる限り探させ、その中から読んでもらうに値することがらを4つから5つ選び、価値の高いものから順序づけをさせていく。こうすることによって、おのずから取材力(集材力と選材力)が高まっていくのである。

「新聞日記」は、優秀作を掲示し、比較させることによって、見出しや本文の書き方、レイアウトの仕方などを学ぶ教材としても生かされることになる。

この「新聞日記」は、その後、児童による学級新聞「日刊くろんぼ」の発行へと発展していく。編集者は当番制とし、協力しながら作りあげた新聞は各家庭に届けられ、保護者の学級づくりの参加も促していくのである。



『新聞活動と学級づくり』1975年、pp.27-28)

## 7. 児童全員70枚達成の秘密

さて、年度初めには400字詰め原稿用紙の半分も書けなかった児童が、年度末には70枚も書けるようになったのはなぜであろうか。日々の指導によって、部厚い日記集をまとめることに喜びを感じるようになり、夏休みには「調査研究」の記録文に挑戦するようになってきた

とはいえ、児童全員が平均70枚も書き上げるのは尋常のことではない。

この秘密は、3月に与えた研究作文と日記指導の合同課題「国内旅行記」（空想による旅行記）にある。春休みを利用して、「社会科で学習した日本の工業・農業・交通の知識をもとに、想像による長文の旅行記」を書かせたのである。

書く前の準備としては、経費は交通費・宿泊費その他を含めて一人10万円以内として旅行の目的やコースを決めさせ、必要な資料や図表（不用になった参考書、新聞、雑誌などからの切り抜きや転写）を揃えさせている。

記述に際しては、絵葉書や切り抜き写真を活用し、紙面を賑やかにさせた。風景ならば車中から写したものとして、記念碑や文化財ならばその正面で撮影したものとして、文章を書かせるのである。また、参考書などから説明を抜き書きしたいときは、「土地の人に聞いたことをまとめてみると」とか「〇〇と説明を記した碑が立っていた」というように、引用の形も工夫させることとした。さらに、旅先から家族または先生宛に手紙を書くこととして、手紙の書き方にも慣れさせた。この他、二人組で旅行に出かけたという設定にして会話文の書き方に慣れさせた例もある。しかも、日記なので、一日たりとも休むわけにはいかない。一日でも中断すると、「旅行」も続けられなくなる。このように社会科の発展学習として、幅広い文種に慣れさせ、興味を持続させることによって、全員が平均70枚の長文を書き上げたのである。

この「国内旅行記」で書かせた文種は、「文章表現力を伸ばしていくために学習すべき文種」の四系列（野地1979）、すなわち、①生活史系列（日記形態、通信形態、生活文形態）、②学習史系列（記録形態、説明形態）、③感想史系列（感想形態、論説形態）、④創作史系列（創作形

態)をすべて視野に入れたものとなっていた。ここに、平野の視野の広さと文体意識の明確さを読み取ることができよう。

## 8. 作文指導過程の緻密さ

平野の作文指導の特色は、指導過程の緻密さにも見いだすことができる。以下、「書く内容の発見」と「書き方の習得」に焦点をあて、平野の指導の工夫を再整理しておこう。

### (1) 表現意欲の喚起と題材の発見

平野が何よりも重視したのは、表現意欲の喚起である。「書くことが見つからない」という子どもたちに対して、あの手この手で働き掛け、「書きたくなるはずみ」をつけることに心を砕く。自分の経験談などを話してやってから、一人ひとりに話題を発見させ、さらに書き出し文例を示してやっている。また、ときには環境(書く場所)を変えたり、時間制限を設けてせっぱつまった気分させたりして、集中力を高めていくのである。

### (2) 場の設定と文種を踏まえた取材指導

平野は、課題設定の際にしばしば手紙の形式を取り入れている。日記指導では、第31週や第38～40週がこれに該当する。だが、これは、手紙文そのものを書かせるわけではない。「手紙文の形式を借りて、生活の中から何と何を取り上げれば読み手が納得してくれるか、満足してもらうのに<sup>ママ</sup>価することがらを素材として選び出す力を身につけさせたい」(平野1978、p. 34)と考えた「手紙作文」である。手紙の形式を借りて、観察文、見学記録文、意見文、詩などをどんどん書かせていく。相手意識を明確にし、「知らせる、教える、教えてもらう」という立場に立って書くので、「想」が明確になり、文章を磨いたり、資料の使い方を工夫したりすることに繋がってくる。場の設定と表現様式の選択が、取材を豊かにし、「想」の明確化につながるのである。

### (3) 負担感の軽減と多様な書き方の習得

作文嫌いを解消することと記述力を高めることを両立させるために、平野は負担感を軽減させることに努めた。また、想像作文も積極的に取り入れ、多様な書き方を習得させていった。

日記指導では、「箇条書き」の活用が「負担感軽減」の典型例である。ややもすると軽視されがちな箇条書きを、「要を得たメモの書き方」の練習として再評価するとともに、構想メモの作成に活用させたり、事実と意見を書き分けさせる手立てとして用いたりした。

「国内旅行記」は、その課題全体が想像作文である。だが、浅薄な絵空事に陥らぬように、確かな調査に基づいて想像を広げるように留意した。例えば、旅行先の方言を調べて表にまとめさせたり、各地の産業や歴史について参考書を調べさせたりするのである。さらに、それらを引用・引例する際の書き方を教えたり、旅館などで出会った人を登場させて会話文の書き方に慣れさせたりするなど、内容と表現の両面において、一人ひとりがオリジナリティのあるものを作り出せるように導いていった。

## 9. まとめ

以上、作文指導計画の構造、日記指導の特色、評価と処理、作文指導過程の緻密さについて整

理し、考察を加えてきた。平野による作文課題の設定、表現技能の教示、指導語を生かした個別指導は、いずれも「アイデアの創出とその組織化」（創構・インベンション）に重点を置きながら、「表現技能の習得」にも目を配り、系統だった指導を展開するものであったと言える。

多くの実りをもたらした平野の作文指導の方法は、学習指導要領の改訂（2008）によって、「書くこと」における学習指導過程が明確化され、論理的文章表現と創作活動の両面が重視されるようになった今こそ、各教室での日々の実践に生きるものとなるであろう。

【注】本稿は、第122回全国大学国語教育学会筑波大会（2012年5月）における口頭発表資料のうち、日記指導に関する考察部分に絞り込み、大幅に加筆修正を加えたものである。

---

#### 〈参考文献〉

- ・野地潤家「関連的指導法の開拓のために」『教育科学国語教育』明治図書，1979年9月，pp. 104-110
- ・松平信久編『日本の教師〈第4巻〉学級文化の創造』ぎょうせい，1995年，pp. 255-281
- ・高森邦明『作文教育論2 言語生活的作文の指導』文化書房博文社，1984年，pp. 98-99
- ・大内善一『作文授業づくりの到達点と課題』東京書籍，1996年，pp. 102-115

#### 〈平野彧の著書一覧〉（国立国会図書館蔵書／丸数字は、作文指導に関する著書）

- ① 単著『作文指導と学級づくり：作文日本一が生まれるまで』明治図書，1972
- 2 単著『こんな子はこう変わる』（シリーズ・現代家庭教育新書），明治図書，1973
- 3 共著『学校と家庭を結ぶ教育』（シリーズ・現代家庭教育新書），明治図書，1974
- 4 共編『子どもが親を嫌う時2（小学生の作文から）』（シリーズ・現代家庭教育新書），明治図書，1974
- ⑤ 単著『くろんぼ学級物語』明治図書，1974
- 6 単著『子どもが感動する時』（シリーズ・現代家庭教育新書），明治図書，1975
- ⑦ 単著『新聞活動と学級づくり：続・くろんぼ学級物語』明治図書，1975
- ⑧ 単著『新しい日記指導』明治図書，1976
- ⑨ 単著『新題材による作文指導』明治図書，1977
- ⑩ 編著『創意を生かした作文の授業』明治図書，1977
- 11 編著『教師生活一年生』明治図書，1977
- ⑫ 単著『作文指導の創造と発展』明治図書，1978
- 13 編著『学級活動の創造事例集』明治図書，1979
- 14 編著『全員活動による学級改革』明治図書，1980
- ⑮ 単著『作文指導の実践入門』明治図書，1980
- ⑯ 単著『どの子も書ける詩の指導』東洋館出版社，1990
- 17 単著『大谷地下軍需工場の青春：中島飛行機・動員学徒の手記』随想舎，1995
- 18 単著『私の出会ったすてきな親子っぱな先生：こう育てれば良い子が育つ』下野新聞社，2000
- 19 単著『われら国民学校六年生：昭和十六年，宇都宮』下野新聞社，2002